園長通信～こころ～ №９６

蓑を着る

2024.8.28

もう忘れてしまったが、何年か前にある俳句と出合った。この前、その俳句と再会した。

浜までは海女も蓑着る時雨かな

初めてこの句と向き合ったとき、妙に心に響くものがあった。そのため、ずっと頭に残っていた。再びこの句を目にする機会に恵まれた。今度は、じっくりと意味を考えたくなった。

この句は、江戸中期の俳人である滝瓢水（たきひょうすい）のものである。船問屋の息子として生まれた瓢水は、若くして俳諧の才を発揮し、後に人口に膾炙するほどの秀句をいくつも残した。

あるとき、一人の僧が瓢水の評判を耳にして訪ねたことがあった。僧は瓢水に会うと、その見識について問おうとしたのだが、あいにく瓢水は風邪を引いており、「今からちょっと風邪の薬を買ってくるから、ちょっと待っててもらえないか」と言われてしまう。これを聞いた旅の僧は、「風邪くらいでいちいち薬を求めるなど、何を弱気なことを言っているんだ。人の生き方を説く素晴らしい見識の持ち主だと聞いて来たのに、とんだ嘘であった。そんなに命が惜しいのか、情けない」と腹を立てて瓢水の帰りを待つことなく去ってしまった。

瓢水が風邪薬を買って帰ってくると、僧がいない。傍らにいた人が事の一部始終を教えてくれた。なるほど、怒って帰ってしまったのか。それならと、瓢水は一句を紙にしたためて、「申し訳ないのだが、先ほどの僧にこの句を渡してあげてほしい。まだ追いかければ間に合うかもしれないから」と頭を下げた。頼まれた人は、急いで僧の後を追った。何とか追いつき、瓢水の句が書かれた紙を渡した。僧が受け取った紙を見ると、そこには一句書かれてあった。それが、上記の句である。この一句で、旅の僧は瓢水の評判が本物であることを知ることとなる。

海女さんは海に潜るのが仕事なのだから、水に濡れることになる。そんな海女さんでも、雨が降っている日であれば、浜までは蓑を着て体をいたわるものだという。どうせ濡れるのだからと、体を冷やすようなことはしない。自分の体をないがしろにせずに、大切に扱うのである。

人間は、少しでも自分を愛おしみ、最後まで努力を重ねていかなければならないということだろうか。この句の「浜」を「死」と捉えると、一層味わいが深まる。死ぬときまでは、とにかく蓑を着る。決して、投げやりにならない。そうして最後の最後まで前向きに、少しでも美しく立派に生きる努力を重ねていく。そんなことを教えてくれる秀句である。